

# “クイア”な幼年期から高校時代 関東地方に住む20歳代前半の 性的マイノリティ男性Aさんのライフストーリー

A Case Study of One Student's Experiences as a Recognized  
Homosexual in a High School

加藤 慶  
(Kato Kei)

## Abstract :

What is “Queer” man's school life? This study examines what his school life is through analyzing of his life story.

This study was conducted at 2007/06 using a series of life story interview with a “Queer” man. As a result of the analysis, Why was he used violence? Because he doesn't have Masculinity.

キーワード：性的マイノリティ、ライフストーリー、いじめ、暴力

Key Word : Queer, Life story, Bulling, Violence

## はじめに

「オカマ」と呼ばれ、周囲の人間から暴力をふるわれる性的マイノリティの男性は、自らの性の在り方に対してどのような意味を付与し、これまで生き抜いてきたのか。その語りを通じて、「オカマ」と位置づけられることによって、どのような扱いがなされるのか、その社会構造を考察することに本研究の目的はある。

非異性愛者などの性的マイノリティの男性に対して、「オカマ」という言葉で差別的に揶揄したり、嘲笑の対象としたり、さらには人間としての正当な権利を認めないような状況は残念ながら珍しいことではない。しかも、それが問題であるとも認識されず、当たり前のことのように取り扱われていることも多々ある。本研究は、「オカマ」「ホモ」などと嘲笑の対象とされやすく、ときに周囲から暴力の対象とまでされる性的マイノリティの男性からの聞き取り調査である。性的マイノリティへの聞き取り調査を

通じて、性的マイノリティに対する不当な扱われ方を変革させていきたいという問題意識をもっている。

本研究の聞き取り調査の対象は、関東地方に住む20歳代前半の男性Aさんである。「オカマ」という言葉によって、周囲の人間からバッシングを受けた経験をもつ。Aさんは、「クイア」という言葉を多用しながら自らのこれまで生活史を振り返って、自らの性的欲望と生活について語って下さった。

「クイア」とは、もともと「変態」を意味する用語である。しかし、主にアメリカにおける性的マイノリティ当事者の社会運動の盛り上がりにより、逆に肯定的に性的マイノリティの総体を取り扱う用語と変化してきたという背景がある。しかし、近年では、性的マイノリティ総体を指し示す概念としての「クイア」としてではなく、アイデンティティを脱構築するような概念・理論の名称としての「クイア理論」も登場

しており、「クイア」という用語の定義が錯綜している事態も起きている。本研究においても「クイア」を用いるが、本研究においては、その概念のどちらを採用するものでもない。本研究においては、研究協力者が自らのライフストーリーを語る中で「クイア」を用いていることから、語られた言葉としての「クイア」を使用するものである。

なお、聞き取り調査は、2007年6月、関東地方において約4時間にわたって行った。Aさんへの聞き取り調査は、Aさんの幼少時代から、高校時代までに至るライフストーリーであり、聞き手はすべて筆者である。

## 1. 先行研究

Aさんのライフストーリーについて検討するまえに、まずは若年の性的マイノリティ男性を対象としている先行研究について概観しておきたい。

日本の社会学研究や教育学研究において、性的マイノリティの若年男性を主軸に論じたものはほとんど見られない。性的マイノリティに対する社会的理解を促進するために、性的マイノリティ当事者である教職員らの手によって性的マイノリティとは何かについて書かれた報告や解説（セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク、2006）などがあるが、若年の性的マイノリティ男性について追った研究の存在は極めて少ない。

日本に生きる若年の性的マイノリティ男性を主軸に論じた研究として、渡辺大輔によるものがある。渡辺は、若年ゲイ男性が自分たちのアイデンティティと生活のバランスをどのように保ち生き抜いているのかを明らかにすることを目的として、4名の十代のゲイ男性からのインタビュー調査を実施し、インタビュー協力者である若年の性的マイノリティ男性の特徴について、次のように指摘している（渡辺、2005, pp216-217）。

「彼らは学校において教師や他の生徒による同性愛嫌悪的な振る舞いにも直面していた。直接的には自分に向けられたものではなくても、彼らはそれを敏感にキャッチし、『沈黙』や『笑

い』でそれを切り抜けている。自分に直接向けられたものに対しては悲痛な叫びを上げていた。同時に学校のなかで繰り返されるジェンダーを基盤とした関係づくりやカリキュラムなど、特に男性性が規範とされた関係性の中では、自らをその規範とされた関係性の中では、自らをその規範に乗せることができず、しかし周囲からの監視の目の中でそこから降りることもできずにいた。彼らはこのような学校で学ぶことに疑問や不信を抱き、そこから一定の距離を保って接するようになる。」

渡辺の分析は、若年の性的マイノリティ男性からの聞き取りによるものであり、本研究と共通する点がある。では、このような学校生活を切り抜けた後に、自らの生活を振り返ったとき、若年の性的マイノリティは、自らの性に対してどのような意味付けを行うのだろうか。渡辺の聞き取りは、生活の今を中心に考察したものである。若年の性的マイノリティの抱える問題を浮き彫りにしていくためには、幼少期から現在までを追いながら、通時的に分析することが必要となると思われる。本研究は、若年である性的マイノリティ男性のライフストーリー、すなわち、幼少期からのより長期にわたる生活史に焦点をあてている点に特徴がある<sup>(1)</sup>。

## 2. プライバシー保護について

ライフストーリーの聞き取り調査によって語られたことは、そのすべてが研究協力者のプライバシーにかかわることであり、その保護が強く求められる。本研究は、「日本社会学会倫理綱領」、および「日本社会学会倫理綱領にもとづく研究指針」に従って、研究協力者のプライバシー保護と人権の尊重を図り、聞き取り調査を実施したものである。したがって、研究協力者の匿名性を保証するため、研究協力者と筆者との間でプライバシー保護の方法について確認を行った。その確認に基づいて、本稿では、研究協力者の名前や筆者との関係などの一切を記載しないことを最初にお断りしておきたい。

なお、聞き取り本文中において、[ ] によって説明が加えられているものは、筆者が後から加えたものである。

### 3. Aさんのライフストーリー

#### (1) 性的な欲望に突き動かされる幼稚園児・小学生の時代

Aさんが思い出せる中で最も古い記憶は、2歳くらいのときの自分の父親との性交シーンではじまる。幼少期からエッチなことに関心が向いており、幼稚園に通っていた時代には「お昼寝のときに夜這いをしたりとか」という思い出があるという。以下はそれに続く語りである。

聞き手：幼稚園のお昼寝の時間？相手は？

A：それは同じ、なんかやらせてくれそうな、幼稚園児とか。ちょっと非常に、ちょっとやってみて、拒否られたらやめよう、みたいな。ノリのよさそうな人とかに夜這いをし。そうすると、中にはちょっといっちゃった変なガキとかいますから。そういうのを相手に、ちょっとカーテンしめて、みたいな。そういう、エッチなことをしてて。

幼少期からの「エッチなことを求める欲望」は、小学校、中学校へと進級しても変化はなかったとAさんは語る。Aさんの欲望の相手は、男性、女性関係ないものだった。欲望が幼少期から明確にあったことから、Aさんにとって、小学校高学年になってから自らの性的な欲望の対象が同性に向くことに気がつくことが多いという、同性愛者の一般的なカミングアウトストーリーに対して、自らとの違いと疑問を感じていたという。

A：そういうカンジのところからスタートして、だからずーと、そういうことは小学生とか、中学生とか続いていたカンジなので。だから、まあ、逆にいえば、よくあるじゃないですか。カミングアウトストーリーで、小学校高学年とか、中学校くらいになって、はじめて同性に対してこう、ドキドキしてしまって、これがひょっとしたら同性愛なんじゃないかと思って、ちょっとね、みたいな。そんなのを見ると、もう大笑いで。あの、で、ほかに自分と同じよう

な人はいないんじゃないかって、すごく悩みましたとかいって、もうホントに腹かかえちゃって。なんか、僕はもうホントに不思議なのは、なんでそれまで自分が何者かに欲望するかっていうことについて、まったく無頓着でこられたんだらうって、不思議でしょうがなくて。だから、僕がそういうこと言われたら、絶対、そこが突っ込み返したいところなんですよ。「小学校5年生まで何を考えて生きてきたんですか」って。「だから、その好きっていうのは何ですか？」みたいな。「性的欲望ですか？それともなんか、こう、アフェクション [愛情] みたいなカンジですかあ？」とか。そういうのがわかんない。「好きの内容はなんだよお」とか思って。僕の場合は、そんなの全然関係なく、欲望の赴くままに、手当たり次第に。だから、男の子だけじゃなくて、当時、まあ、女の子の方が、あれですね。そのへんはいやらしいので、もう4、5歳くらいでけっこうきてる子とかいて、なかなか、実際にこう、やるところまでいけないけど、でもなかにはいっちゃった女子とかもいるので、そういうところと仲良くなりつつみたいな。

#### (2) 周囲の人間に浸透する異性愛中心主義と同性愛嫌悪

Aさんは、成長に伴って、自らの性的な欲望の変化ではなく、「ヘテロノーマティビティ」[異性愛中心主義]と、「ホモフォビア」[同性愛嫌悪]が周囲の人間に浸透してくるを感じるようになる。Aさんによれば、それは小学校1、2年生くらいから始まり、3、4年生になると「花盛り」となるという。しかし、女性に対しても性的欲望を感じるAさんにとっては、当時、そのヘテロノーマティビティとホモフォビアの規範を「パス」[切り抜ける]することも可能であったと語る。

A：逆にそういうのがあったんで、小学校5年生くらいになると、もうかなりホモフォビアがこう刷り込まれてから、こうなっ

てるんじゃないか。気づくからショックで、みたいなのがあるのかな、と思うんですけど。僕の場合、ずっとずっと前からだったんで。経験的などころで知っていたので、それからあとからホモフォビアが[きた]。だいたい、あれがきはじめるのって、小学校低学年ぐらいかなって。ヘテロノーマティビティがもろ入ってくるのは、だいたい僕が見ちゃう限りでは、小学校1年生、2年生くらいからはじまって。で、あの、3、4年ぐらいのときに花盛りみたいな。そんな感じで、いよいよ大爆発みたいな、かんじかなっていうふうにも。

ずっと前からメチャクチャだったから、逆にいえば、ホモフォビアの論理っていうものが、僕のなかで全然浸透しなくて。矛盾してたんで、完全にはねのけてしまっていて。それが自分の中でインプリンティングされなかったんですよ。いや。もちろん、されてる部分はあると思いますよ。でも、あの、どこか自分の経験的などころとは切り離されてた部分が大きくあって。取り入れられた部分もあったとは思いますが、大部分が切り離されていて。で、当時から別にその男性だけっていうわけでもなかったんで、まあ、そのへんではちょっとホモフォビアと親和性があったっていうのもあって、そっちの方に合わせていくというか、パスしていくというのは可能という状況もあったので。

聞き手：女の子がいたから？

A：そうです。そうです。だから、そのへんがかかわっていけば、矛盾することもそんなになく、うまくいっちゃってたんで、逆にその点では、よくはなかったとは思いますが。ただ、逆に誰に[性的指向が]向いても、たとえそれが同性であったとしても、自分の中では経験的にまったく、小学生のときとかもずっとやり友って子もいました。

聞き手：相手は比較的すぐに見つかった？

A：近所の子と、結構やらかしたってかんじ。

聞き手：年下とか、年上とか、同年とか。

A：ああ、関係ないです。同年もいましたし、年下もいましたし、あんましそういうことで、手を出していくのが悪いことだっていうことは全然考えていなかったんで。気持ちよければいいじゃんって、なってたんで。だから、結構、小学校とかに通いつつ、そういうところに接しつつも、関係とかも続いていたり。そういう、まあ、本来であれば二分するものが、自分の中ではまったくぶつかることもなく、葛藤することもなく。いっちゃってましたね。

### (3) 「ジェンダー不適應」と同性愛に対する嫌悪と暴力

Aさんは、女の子との性的な接触によって、周囲の異性愛中心主義、同性愛嫌悪の規範を切り抜けていたと語るが、しかし、その後の語りでは、小学生、中学生のときに、面白おかしいパロディのような役割を積極的に担う存在になりきることで、異性愛中心主義と同性愛嫌悪の空間を生き抜く戦略をとっていたとも語っている。

いわゆる男らしさというジェンダーに適應しているわけではないAさんは、女の子との性的な接触とは無関係に、周囲から「オカマ」の扱いは受けるようになった。Aさんは、当初は、「オカマ」として周囲から期待される、面白おかしいパロディのような役割を演じることで、周囲からは受け入れられていたと感じていた。だが、次第に生きづらさを感じるようになり、その後、暴力を受けるようになったという。

Aさんが「オカマ」であるという話題は、学校内の、本人の知らないところで広まりをみせることとなり、さらには本人とは直接的に関係のないような、社会に流布する「オカマ」のイメージを押し付けられるようになった。

聞き手：よく性的指向の問題って、いわれるけれど、Aくんの場合、自分にとっての問題はなんだったのかな？同じように性的指向の問題なのか、それとも、何にも感じなかったとか。何かあったのかな？生きづらさとか。

A：ありましたね、それは。というのは、自分の中ではなかったんですけど、僕、敵は自分じゃなかったんです、当時。それは担任だったんです。小学校のときとか、中学校のときとか、常に外との闘いでしたね。要するに、当時からその点では、やっぱりアウトな人間で、いまから比べれば信じられないくらいにオネエでもあったんですよ。小学校3、4、5 [年生] くらい。かなりキャンプで、オネエで、いってたんですよ。だから、そのままいっていたら、たぶん全然違うキャラクターだったんじゃないかなと思うんですけど。

聞き手：まわりの反応はどうだったの？先生に対してとか。

A：だから、まわりのホモフォビアがすごいんですよ。当時は、ジェンダー不適合と同性愛の区別なんかつけられるような頭をもっている人は誰もいないんで、そこが簡単に結び付けられていて、そのホモフォビアとジェンダー不適合に対してのフォビアがタッグを組むみたいな、その二つに対してのフォビアとか、ホントに激しくて。

聞き手：どんなことがあるの？ホモフォビアとかいうと。

A：いや。言葉の暴力から、身体的な暴力から、いろいろありますね。

聞き手：言葉だと何をいわれちゃうわけ？

A：いや、単純にあれですよ。「オカマ」とか。いや、本当にいろいろあったんで。

最初はですね、わりとキャラ的なところで、あの、ピエロみたいな感じでよかったんですけど。

聞き手：どんなん？ピエロみたいななのって？

A：面白おかしく。キャラ的なかんじ。で、僕も結構面白がってやっていたところがあるんですけど、だんだんそれが強くなっていくと、そうはいかなくなってくる。これが不思議なことに。最初はわりとパロディっぽいかんじ。

聞き手：パロディっぽいってというのは？

A：パロディっぽいってというのは、面白が

る。結構ノリよくやってたんですよ。オネエで。ちょっとだんだんそうはいかなくなってきた、要するに、自分が直接近い関係だったら、自分の人間関係っていうのがあって、パーソナリティとか、そういうものも、まあ、わりと良く把握している人たちだったりするんで、そういう場合おいてのみ有効。その、なんていうんだろう、キャラ的なものは有効になるのかなって今は思うんですけど。それが、自分のことをあまり知らない人とかになってくると、言説だけが一人歩きしちゃうんです。「あの人はオカマだそうですよ」って。そうすると、その人のなかに持っている、僕のイメージではないイメージを与えられて、それに対するフォビアだとかバッシングだとかがくるんですよ。そうやってきたら、めんどくさいことになってきたんですよ。

聞き手：たとえば、どんなことがあるの？

A：たとえばでいうと、要するに、あまり笑えない状況に。なんか、あの面白がられていわれているのではなくて、明らかに排斥しようと思っていわれているみたいな。そこに、スキマっていうか、なんていえばいいかわかんないんですけど、愛を感じないっていうとおかしいんですけど、自分の身近にいて、常に知っている人から言われるのと、全然知らない人から言われるのは、やっぱりかなり違う。っていうか、アナタは誰ですかって感じになってくる。その人は明らかに、自分のことを蔑んだ目でみてるっていうのが。

聞き手：こっちは知らないけど、向こうは知っているっていうこと？

A：そう。しかも、その関係は明らかにむしろ、平等ではない状況になってきて。なんだろうこれは。そのころから、だんだん狭い空間、例えば、自分のホントにクラスの中だけでのセマイ空間のところだったら、うまくいく。うまくいくっていうのはおかしいですけども、別にまあ、自分でも、いいかなと思ってたところが、明らかにそうではないところまで拡張し始めた

ときに、ちょっと笑えない状況になってきたなと思って。

聞き手：それは小学校のとき？

A：高学年ですね。小学校高学年。小学校高学年にあがるにしたがって、どんどんそういう話は広まっていますから。学校内に。要するに中途半端に広くて狭い。学校っていう狭い空間の中で、でも、クラスよりは広い。だから、要するに学年っていう単位が一番嫌な単位ですね。クラスだったら、毎日いるし、自分の知っているところの関係、自分も絶対に知っているし、向こうも知っているしってというような関係。でも、クラスが別になってくると、自分の知らない人ももちろん出てくるし、向こうも、別に僕のごことはよく知らない。でも、名前を知っているくらいなかんじになってきたときからは、ちょっと…。それまでは楽しんでおけばよかったんですけども、全然そういうわけにはいかず。その人の勝手なホモフォビアのイメージを作られて、それに対するバッシングを与えられるというようになってくると、こう、なんていうの、いきなり全然知らない人に、「オカマなんだってねえ〜」。イヤな顔していわれるんですよ。まあ、要するに、こう、汚いものを見るような顔で、なんか「はあ？誰ですか、アナタは？」みたいな。そういうような状況になってきて、だんだんそれが増えてくるんですよ。なんか、そうやってきたときに、「ああ、マズイなこれ」って思って。その身近な、その劇場から出てしまった人間関係に対する收拾がどうしてもつかなくって。それを例えば、なんとかするんだったら、学年中に、こう、パロディで見せて拡散するとかいう方法はありますけど、でも、そんなことはいくらやってもキリがないですから。で、それで、もう、それよりももっとエスカレートしちゃったのが、例えば金八先生の世界だとか。

聞き手：金八先生の世界って何？

A：えっ。だから、あるじゃないですか。金八先生の場合は、だいたいあそこのクラ

スの中だけでストーリーが完結してるじゃないですか。でも、あれって絶対そうはいかない不安をもっていて、自分の知らない人っていうのがいるわけだし、自分のことを知らないで、言説でしか見ない人っていうのも絶対いるってことはわかっていますから。たとえ全校生徒の前で、なんかそういう話をしたところで絶対無駄。今度はウチの学校に言説だけで広まっていく。それには、自分のことなんか知らない人は絶対にいるはずだし、それに、「自分はこうなんです」なんて、いくら言ったところで、それはホントに限界があるので、絶対に自分の知らないところで、知らない自分が勝手に一人歩きして。勝手にどっかで言われて、それがいつどこで直接降りかかってくるかわからない。そんな状況。で、あの、中学校に行くと、ますます、今度は別の学校っていうのが出てくるじゃないですか。中学校になると。

聞き手：別の学校？

A：要するに学区っていうか。今は学区ってなくなりましたが、中学校の段階で、僕の場合は、僕の行っていた出身中学校は、出身小学校と、もうあと一つか二つぐらいの学校から集まってくるんで、そういう人たちにもウワサはあつというまに広まっちゃう。そうすると、僕のキャラクターを知る前に、その、言説っていうか、言葉が先に入ってくる。そうすると、だから、あれですよ。単純に、「あの人はオカマだそうですね」って。で、そうすると、その人のもっている、その人の頭の中にあるイメージで、そのホモフォビクなイメージをつくりあげ、それに対しての攻撃 [をしてくる]。だから、それは自分とはまったく関係のないところで作られて、まったく関係のないところで培われたものが、自分に対してバッシングという形でかえってくるので、もうホントに、自分の予期しないことになっていっちゃうってかんじで。だから、それは自分と初めて会う前からその情報だけが入っているみたいなんで、ものす

ごく困る。どうしようもない。自然に情報が入ってるみたい。だからって、それをセクシュアリティ的に否定することもできないけれども、でも、肯定をすることは当然、きてるのは確認ではなくて、バッシングなので。だから、それを受け入れるわけにはいなくて。で、どうすればいいんだろう、みたいなかんじで。やっぱり言葉の暴力によるものが多いですけども、あの、男性失格的なイメージが非常に強いので、なんていうんだろう、やっぱり、そこには確実にミソジニック [女性嫌悪] なものも入ってくるけれどもそれでなんかちょっと、うーん、これもちょっと紋切型で嫌なんですけども、あの、ヘテロノーマティビティとか、特にマスキュリニティ [男性性] とスポーツみたいな感じになると、なんかそこで、男子、女子みたいな感じで別れますけど、えっと、そういうときには非常にマズイ状況に。要するに、フェミニンなものが入ってくることに對するものすごい排除的なので、それが原因で、なにかちょっとでも失敗すると、ものすごいバッシングの対象になる。ちょっと呼び出されて、殴られたりとか、あとは、なんていうんだろうな、女の腐ったようなヤツとか、そういうようなカタチで。

聞き手：それは誰に殴られるの？

A：同級生です。

聞き手：男の子？女の子？

A：男の子がほとんどですけども、女の子の方が比較的、直接的なホモフォビックな言動はあんまないんですが、でもやっぱり、まったくないかっていうとそんなことはないです。だからやっぱり、直接的に言われたりしましたし。

聞き手：女の腐ったようなヤツっていうのは、例えばどういうことに対してなの？

A：フェミニンな言動。たぶん、行動的なものじゃないかと思うんですけど。

聞き手：たとえば、さっきの話だと、欲望があって、こう、自分の中であるじゃない？それが、どこかフェミニンになること

に結びつくのかな？

A：自分の中で、その二つの結びつきっていうのは特にないんです。ただ、それは社会の中で学習していくうちに、身につけてしまったイメージ的なつながりなのかもしれないです。それは僕自身にもわかりません。

聞き手：そうすると、その時の、中学生のときにされたっていうのは、欲望に對してされたというよりも、フェミニンな行動に對して？

A：いつでもそうでした！基本的に排除されたのは、ホモフォビアではなくて、やっぱりジェンダー不適応。あの、フェミニンであるだとか、マスキュリニティに必要なものを備えていないとか、そういうことに対するバッシングが、ホモフォビアと混同されて向かうことが僕の場合、ほとんどでした。純粋に、ホモセクシュアリティということに對してはあまり、あの、えっとイメージがわいているというような感じは、ちょっとみられない。例えば、これはまったくの妄想ですけども、例えば、適当な男子とかつれてこられて、やってみろよとか、そういうようなことがもしホモセクシュアリティに関する完璧なフォビアだったら、そういうかたちで発動される可能性も結構考えられるんですが、そういうことは一切、僕の場合はなくて、もうひたすら、フェミニンなものに對しての攻撃だったっていう事情がありますね。だから、フェミニンなもの イコール 同性愛的なものっていうカンジの。だから、通時的なものでしかなかった。むしろ、働いていたものは、ホモフォビアではなくて、ミソジニーだったかなあ。だからって、男子は女子をすごく蔑視していたっていうわけではないんですが。でも、逆にそれが教育上できないから、そっちの方に現れたとか、そういう解釈も、まあ出来るかもしれないですけど。まあ、わかんないですけど。

## (4) 期待できない学校の先生とオトナたち

Aさんは、「オカマ」と位置づけられることによって、周囲の人間から暴力の対象とされるようになっていた。では、周囲の先生やオトナたちに対して、何かしらの助けを求める気持ちはなかったのだろうか。

Aさんは、この質問に対して、先生やオトナに対して「期待してなくて」と答えている。そのため、「自分でなんとかしなくちゃいけない」という想いを強く抱いていたという。

聞き手：そのときに、先生とか、親とかって、いろんなオトナがいるわけじゃない？  
なんか、その人達とはなかったの？

A：えっ—とですね、あの、もとより、オトナとか先生とかいうものにまったく期待してなくて、助けてくれるっていうイメージでは全く無かった、もともと。もともと、僕って先生に恵まれてなくて、小学校のときからロクでもない人ばかりで。姉はわりと、いい先生っていう、評判のいい先生にあたるが多かったんですが、僕の場合はダメダメで。先生に何か期待できるっていう感覚が、もとより培われなかったんで、もともと先生とかには期待してなくて。あのー、なんていうかな、先生がなんとかしてくれるっていうのはなかったです。自分でなんとかしなきゃいけないっていうのが、すごく強かったです。

聞き手：先生はこういう状態って知ってたのかな？

A：いや。それは知ってるでしょ。むしろ、助長されるようなことはあっても。

聞き手：助長される？

A：されます、されます。具体的に、正確に、その言葉が思い出せないんですけど、助長されることは実際にありましたよ。たとえば、授業中とかに。あれ、具体的になんていわれたんだっけな。あれ、具体的な言葉はなぜか思い出せない。

## (5) 学力とスポーツ、文系理系に関係するヘテロノーマティビティとホモフォビア

中学までは、「オカマ」として暴力の対象とされたAさんだが、高校に進学してからは、その環境にも変化が訪れるようになる。その環境の変化の理由として、Aさんは、学力とスポーツ、そして文系理系という学問の性格の3つの要素が関係していることを挙げる。すなわち、スポーツは出来るけれども学力的には高くない人々が特に異性愛中心主義と同性愛嫌悪の規範が強いが、進学校にAさんが進んだことによって彼らとの関係はなくなったというのである。また、理系は異性愛中心主義、同性愛嫌悪が強い傾向があるが、Aさんは文系の進路を選択したため、高校内においては暴力を受けることはなかったのだという。しかし、このような周囲の環境においても、なおAさんは、自らが「すり抜けて」生きるための戦略をとっていたのだと語る。つまり、そこは暴力を受けることはなくとも、Aさんにとってはすり抜ける必要がある空間だったのである。

聞き手：Aくんは、その中学のときの友達に、そういうことをされて…

A：友達じゃないですけど（笑）。

聞き手：その人達は、中学校までは一緒にいるわけじゃない？

A：はいはい。

聞き手：高校は？

A：高校に入ったら、一気に人間関係が変わりました。

聞き手：あ、高校に行くと、一気に人間関係変わる？

A：変わります。変わります。まず、元中[同じ中学校出身者]っていますよね。そういう人がほとんどいなくなるじゃないですか。

聞き手：えっ、なんで、なんで？

A：えっ、だって、バラバラに散っちゃうから。同じ中学校の人たちから、えっと、うち、40人くらいクラスで、5クラスありましたけど。それが同じ高校まで続く可能性なんて、せいぜい10%くらい。



聞き手：えっ、どうして？地域的に？学力的に？

A：学力的？あー、そうか、うちははっきり言って中学校のレベルは低かったと思います。しかも、それがなぜかスポーツが出来る人となぜか比例してて。スポーツは出来て、でもお勉強はできない。そんな中学校だった。ようするに、バッシングする人って、頭が良いはないんで、あの、そういう人と同じ人と同じになるっていうのは極めて低いです。

聞き手：高校は進学校だったのかな？

A：そうですね。いわゆる。そういう人は、いままでバッシングしてきたような人たちっていうのは、基本的に一緒にならない。僕は2年生くらいから、文系、理系ってわかれてきますが、さらに、当時の2年生のときには、やっぱり男子っていうのは、バッシングするのは圧倒的に多かったですから、そういう人はホモソーシャル〔男性同士の非エロティックで強固な関係〕な、あの理系の世界に行ってしまうわけです。僕はもうすでに文系のほうにいたので、かなり、知ってる人がいなくなってくる。高校のときに、元中の人なんか、とくに3年生のときなんか、1人もいなかった。高校のときは割と要領よくやってたんで、高校のときに、バッシングを直接的にうけることはなかったです。

要するに集まって卑猥な話をするようなところでは決して出ない。そんなかんじで高校は過ごしていましたね。で、別にもうまわりとのバッシングにつかれていたので、「このままではいけない、戦わなくちゃ」とか、そういうのはなくなっていて、「疲れたからめんどくさい！」って、なっていて。

でも、当時からずっと思っていたことはあって、うまくそこからすり抜けていくための戦術でやっていたにすぎなかったんで、自分の中で、やっぱり抵抗感というのは自分の中でのこっていたようで。つまり、アンチ・ホモフォビア〔反同性愛嫌

悪〕。周りに対しての。それはもちろん、今もずっともっている。

### 3. 考察

Aさんが「オカマ」と位置づけられ、周囲から暴力の対象となった理由は、Aさんの性的な欲望のありようによるものではない。Aさんによれば「オカマ」と位置づけられ、暴力の対象となった理由は、Aさんが男らしさのジェンダーに不適應であったからだという。

そして、Aさんが「オカマ」として周囲から期待され、Aさん自身が振舞った行動は、オネエで面白おかしく振舞うことであった。当初はこの振る舞いによって周囲から受け入れられたように感じたAさんだが、しかし、Aさん自身を直接的には知らない人々からは、「Aさん」という個人というよりも、あくまでも「オカマ」という位置づけの存在として扱われ、暴力の対象とされるようになった。これらの背景にある異性愛中心主義と同性愛嫌悪の規範は、Aさんの経験によれば、学力とスポーツ、そして文系理系という学問分野の性格に関係するものだという。

これまで、性的マイノリティ、特に同性愛者などが「オカマ」として暴力の対象とされたり、社会から周辺化される理由は、性的指向が同性に向くからであると言われてきた。つまり、問題は性的指向であると。しかし、Aさんが「オカマ」と位置づけられ、暴力の対象とされた理由は性的指向ではなく、男らしさのジェンダーを身につけることが出来てはいなかったことにある。Aさんにとっての問題は、自らの性的指向や欲望の問題ではなく、男らしさのジェンダー、男性性を身につけることが出来ないことによって「オカマ」という役割を周囲から担われ、暴力の対象とされることにあったのである。

#### 【注】

(1) なお、本研究で用いるライフストーリー研究とは、客観性や客観的事実を追い求めるものではない。聞き手と語り手の相互行為によって構

築していく物語の世界を考察していくものである。ライフストーリー研究については、桜井(2005)を参照されたい。

#### 【引用文献】

渡辺大輔「若年ゲイ男性の学校内外での関係づくり—学校空間が持つ排除と分断の政治の検討にむけて」『教育学研究』2005

#### 【参考文献】

河口和也『クイア・スタディーズ』岩波書店, 2003  
桜井厚『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房, 2000  
桜井厚・小林多寿子編著『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門』せりか書房, 2005  
セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク『セクシュアルマイノリティ』明石書店, 2006  
福岡安則『聞き取りの技法—〈社会学する〉ことへの招待』創土社, 2000